

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K03	氏 名	重松 康子
研究主題 —副主題—	読者反応理論の「間」の考え方を援用した文学の授業		
所属校	八王子市立城山小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	国語科は小学校教育の中で最も多くの時間数を占めている。その中でも文学教材は日本の国語科の歴史上古くから教科書に掲載されている。しかし、日本では文学の指導が長年行われてきたにもかかわらず、文学の指導に困難を感じている教師が多い。他の教科と違って、指導すべき事項が明確でないことや文学教材を使って付ける力が曖昧であることがその原因として挙げられる。子供が物事を理解するための構造を知らなくても、指導の方法を身に付けることで指導はできるが、子供がどのような過程をたどって理解するのかという構造を教える側が理解している場合とそうでない場合では、指導法にも差が生じてくると推察される。私たち教師が「教える」ことに関しての専門家であるからには、指導法だけに着目していかに教えるのかを追究する前に、子供の理解の仕組みを知りそこから指導法を研究していくべきである。 子供が「読む」ときにどのような過程を経るのかということを教師が認識した上で、教室でどのように文学の指導を実践していくのかを考察していかなければならない。「読むこと」を解明する手掛かりとして、本研究では、まず「読む」行為の仕組みを「読者反応理論」から探っていく。その上で、「読む」行為において生じる作用を促進させるための指導について提案していきたい。
II 研究の方法	読むことの過程を解明するために、「読者反応理論」が示す理論に触れ、読者反応理論の多様なモデルの中で「間主観的モデル」に着目した。「間主観的モデル」では、文学作品を成り立たせるためには、「間」がもたらした「意味作用」によって、読者が自らの中に「一貫性」を形成していくことが重要であることを主張している。そこで、教室で読みの授業を行う際に、子供たちにつかませたい「間」を①時間の経過、②関係性、③不確定性、④非整合性、⑤非共感性の五つに分類した。これらの「間」を用いて具体的に発問を考え、その有効性を検証した。 【実施校】 A 市内小学校第 3 学年 1 組 30 名、2 組 29 名 【教材】 「モチモチの木」(斎藤隆介作 教育出版 3 年下) 【調査実施日】 平成 25 年 11 月 26 日から 11 月 28 日 【調査方法】 授業の中での中心となる発問を 1 組と 2 組で変えて行い、発言やワークシートの記述から、子供の反応の差異を見る。1 組では指導用図書の展開を参考に、発問は指導用図書に準じて行った。2 組ではテキストにおける教師が捉えた「間」を発問にした。授業の子供たちの反応から「間」を捉えた発問の有効性を検証する。

Ⅲ 研究の結果	第1時の1組で実施した授業では、テキストの中で語り手が述べている「全く、豆太ほどおくびょうなやつはない。」や「どうして豆太だけが、こんなにおくびょうなんだろうかー。」の叙述をそのまま受け止め、「豆太は臆病である」という意見のみに終始し、そこから広がりは見られなかった。 2組の授業では、教師からの「豆太は本当に臆病か。」との発問をきっかけとして、表面的な読みで捉えるのではなく、自分の経験と登場人物を結び付けて考えたり、叙述を基に想像を膨らませて読んだりすることができた。 第2時の1組で行った授業では、昼間と夜の違いを読み取っていった。昼間の豆太と夜の豆太の違いを問うと、それはテキスト上に書かれているので、子供たちの発言もテキスト上の文をなぞるだけで、それ以上の深まりは見られなかった。 2組では、「昼間と夜で変わっているものと変わらないものは何か。」とテキストに書かれていないことを問いかけることにより、子供たちの中に不確定性が生じ、豆太とモチモチの木の関係をより明確に捉えようとしている様子を発言からうかがうことができた。授業中での対話を通し、昼間と夜で変わるのは豆太の気持ちであり、それによってモチモチの木の見え方が違っているということが徐々に整理されていった。 1組では、子供たちの発言にあまり深まりは見られなかった。一方2組では、教師の発問により子供たちの中に不確定性が生じ、1組で行った授業展開よりも、明らかに子供たちは思考し、分からないからこそ、他者の考えを聞こうとする姿勢が強くなっていたことがうかがえた。子供たちは、教師からの発問により「間」について考えることで、テキストには書かれていない関係性を読み取ったり、自分と照らし合わせるといった反応を示したりした。
Ⅳ 考察	「間」を捉えた発問により、テキストの「間」を子供たちが埋めることができ、結果的には豆太の心情にも迫ることができたのではないかと考えている。さらに、「間」に反応することにより対話が生まれ、そこから自分の読みを再構築していくことができたのではないかと考察する。本研究では、読者反応理論から、「読むこと」を読者とテキストの「相互作用」とであると捉え、読者反応理論の「間主観的モデル」が示すテキストの「間」を捉えた発問をすることで、読者である子供たちが「間」に反応し、創造的に読むことができるという示唆を得ることができた。